

名 蠖 蛭 已上六名 一名 蛭 蠖 一名 曲 蠖 出古注 和名 美々須。

〔倭名類聚抄十九〕白頭蛭 本草云、白頭蛭、一名 土龍 和名可布 良美々須。

〔箋注倭名類聚抄八名〕千金翼方、證類本草下品同、刻版本標目、頭作頭、與本草和名伊呂波字類抄

合、然伊勢廣本那波本皆作頸、與諸古本及千金翼方證類本草同、作頭、誤類聚名義抄作蛭、亦頸俗

字 略 ○中 本草和名云、美々須、源君蛭訓、美々須、故白頭蛭訓、加不良、美々須、不從輔仁也。

〔類聚名義抄十〕白蛭蛭 一名 土龍 カブラミ、ズ。

〔日本紀略六〕貞元二年二月廿五日丙辰、山階寺下階庭、蛭蛭出、廣八尺長廿二丈。

〔燕石雜志四〕猴蟹合戰

蟹と蛭蛭と戰ふ事あり、頭陀物語に、團友齋涼菟、筑紫のかたに行脚せし頃、一日遊山して日暮て宿にかへらんとするに、後方に物あり、怪しと思ひて見かへれば、地をはなる、こと三尺ばかり、長さは丈あまりと見ゆるもの、赤き色、炎の如くなるが、風をおこし、さかさまに立て動くとも飛ともなく、宙にはなれて近づき來る程に、涼菟魂消て、肌膚粟のごとく、襟寒うなりて、呼んとするに聲發す、わが足に手をかけて、一歩づ、前にす、まんとするに、忽地後方に音して、水さはさると鳴り、木草颯と戦ぐに、物の響ひしと聞ゆふりかへり見るに、その物を見ず、略 中 人の家に走り入り、略 中 亥かぐの變化にあへるよしを告、主人これを聞てうちほう笑み、そは世にいふばけ物にあらず、この山の蛭蛭也、蛭蛭山の土を食ひて、年を経れば、土氣を起し空に飛行す、必けふの如く雨霽し夕つかたは、いくつともなく出あるき、澤蟹と戦ひて、これを打つぶして腦を吸へり、このこと西國に多かり、この蛭蛭は恐るべからず、澤蟹は恐るべし、略 中 蛭蛭の事、その虚實はいまだ知らず、蟹には殊に巨大なるものありとぞ、略 下

〔嬉遊笑覽十二〕こゝにて小兒の陰はる、時はみ、ずを取て洗てはなつ呪あり、鎮江府志、今小兒